



100 books

文芸同好会サークル員が選びました。



2014.11

「われわれが日頃人間性と呼んでいるものがこの渦中で、忽ち見えなくなってしまう。その痛烈な作用を愛します。」

宴のあと 三島由紀夫

プライベート裁判の話であまりにも名高い一冊。東京都知事選を舞台に、老年の男女の愛と野望が描かれている。一見お堅そうな印象を受けますが、三島の作品の中ではかなりエンタメ成分と文学のバランスがとれた堅実な良作。選挙がテーマですが三島独特の政治色はなかなか薄く、特定の思想・宗派にこだわりのかたでも全然読んで頂けます。



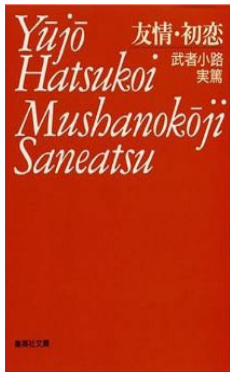
(河合)

文学
文学

「自分は淋しさをやっとなえて来た。今後なお耐えなければならぬのか。全く一人で。神よ助けたまえ」

友情・初恋 武者小路実篤

全童貞号泣。この作品を見るたびにまだ泣ける自分を見つめ、ああ、俺はまだ童貞で幸せだと胸を撫で下ろす。みうらじゅんも言っていたしね(多分)。男の純愛なんて女から見たらおままごだ!分かってるんです頭では!分からないんです男には!



(藤野)

「聞こえるか? 僕の、新しい歌だ。」

コインロッカー・ベイビーズ 村上龍

「芥川賞なんか二十代でとつておかない」と言つて全ての作家志望が「ぐぬぬ」つてなった村上龍の代表作。まあけどこれはすごいっすわ。コインロッカーで拾われた二人の赤ん坊、キクとハシ。世界への怒りと暴力の欲求。それは思いもしない形に収束されてゆく。読んだ後「ダチュラ」つて眩きたくなるよねえ。



(藤野)

『小さい頃、いつも遠くに、塔があった』
『殺してやる、あいつめ、殺してやる!』

掏摸 中村文則

大江健三郎賞受賞!と共に海外の著名な賞にも多数ノミネート!作家志望としてはうっちらやますいゝ!つて感じですが(こんなんすぐ書くから箸にも棒にもかからんのじゃ)。天才的スリ師が巻き込まれる「悪」、ノワール小説として見ても一級品です!ちなみに著者、イケメンです。



(藤野)

パンク侍、斬られて候 町田康

ボケたらツッコむ。上方の文化です。ねえ。けど、ボケた後誰もツッコまなかったらどうなるんでっしやる。時は戦国、家老は家来に「マジ?」つて言い、戦場では特設ステージでポブマーリーが歌いだす!誰かはよツッコめや!読者の叫びは虚しく物語はあらぬ方へ。



(藤野)

地下室の手記 ドストエフスキー

歴史上一番有名な作家と言えるドストエフスキーの著名作。いきなりカラマーゾフとか行こうとして、その厚さにひるんだあなた、こっちにいいもんありませ。著者の前期から後期への過渡期に書かれたこの作品。「ドストはちよつと」な人にこそおすすすめです。



(藤野)

行け。勇んで。

小さき者よ。

「佐藤って、ああいうムキムキの男がタイプなの？」
それは二度と戻ってはこないはずだ。彼女にはそれがわかる。

小さき者へ・生まれ出づる悩み

有島武郎

母を亡くした、筆者の息子達に宛てた手記形式の短編。如何に母が子供たちを愛し、臨終間際まで尊厳を貫き通したかを克明に記すと同時に、筆者の父親として、作家としての壮絶な覚悟の表明がなされる。過酷な運命に身を投じる息子達への身を切るほど痛切な愛が、北の大地の極寒の描写と相まって、ひしひしと伝わって来る。



(山田)

ファイナルガール

藤野可織

去年芥川賞を受賞した藤野可織さんの短編集。『爪と目』からは一変して動的な雰囲気。一番好きなのは「狼」という短編。自分が留守番しているときにふらりと現れる狼。昔話の「狼と七匹の子山羊」を思わせるような短編で、ぞっとするような光景が淡々と描かれている。

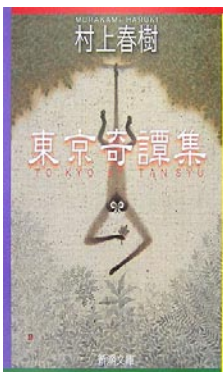


(柴田)

東京奇譚集

村上春樹

東京が舞台の話を集めた短編集。それ以外にも、何か失う話が多いと感じる。それは鮫に食べられた絵息子だったり、自分の名前だったり、ドアだけ雨傘だけドーナッツだけか象さんだかのかたちをしたものだったりする。見つからないものを探し求めながら、二度と会えないと知りながら、私たちは彷徨うことしかできない。



(柴田)

文学 文学

「でも私、あんなラヴレター書いたじゃない」

人は、一度巡り合った人と二度と別れることはできない。

アリスが追いかけた兎はただの兎じゃなくて結局女王の執事みたいなの、そういう使用人だったでしょう。

恋文 連城三紀彦

連城三紀彦と聞けば推理小説の方を思い浮かべる方も多いでしょう。『戻り川心中』を始めとしてたくさんさんの推理小説を世に出してきた作家ですから。しかし！『恋文』はれっきとした恋愛小説です。だれも死にません。流れるような文章で描かれる美しい恋愛は連城の忘れられがちな一面かもしれません。

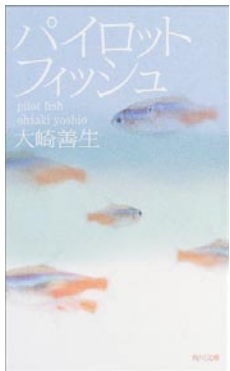


(柴田)

パイロットフィッシュ

大崎善生

流れるように、人は過去に戻っていく。人は一度出会った人とは別れられない。なぜなら記憶は体の一部だから。嫌な記憶もいい記憶もただ自分の中にある。小説の中で記憶は水に例えられていて、自分を構成する過去の水たちに思いを馳せたくなるような一冊。



(柴田)

穴 小山田浩子

今年の芥川賞。村上龍が選評で、「難しい文章構造がない」と書いていたが、確かに物語である。かの有名な『不思議の国のアリス』をモチーフに、田舎へ引っ越してきた主人公と「穴」を巡る物語は進んでいく。全然関係ないんですが、小山田浩子さんの顔が大嫌いな高校の時の先生にめっちゃ似ていて若干怖い。



(柴田)

「好きじや」

こちらあみ子 今村夏子



(柴田)

人は純粹に好きな人に好きと言えない。恥ずかしい。振られたら怖い。関係が崩れるのが嫌。相手に別に好きな人がいる。好きな人に躊躇なく好きと言える人はそんなにいない。けれどあみ子は違う。どんな状況でも「好きじや」と言い放つ。それはちよつと異質で病的な行為なのかもしれない。けれど一番純粹な行為だ。

心はすべてを

知っている。”

アルケミスト 夢を旅した少年



(関口)

パウロ・コエーリョ

ゆめに視たピラミッドを目指す羊飼いの男の子が、賢者（錬金術師）に導かれて旅をするファンタジー。旅の中で少年は泥棒や学者肌のイギリス人、クリスタル商人、オアシスの少女、そして賢者と出会う。自分に言い訳をし、夢を先延ばしにして立ち止まる事もあれば、一本の糸でしかない人生で二の足を踏む私たちに告げる物語。

ブラフマンの埋葬



(関口)

小川洋子

芸術家たちの別荘・作業場として使える〈創作者の家〉。そこで芸術家たちの世話をする〈僕〉が出会った、ボタンの様な鼻と、尻尾と水かきのある〈ブラフマン〉。作中に個人名が出てこず、その不思議な動物も〈謎〉を意味する名を冠している。追えば消える陽炎のような、静謐な雰囲気を選えたイメージの重なり合う世界。

夏はもう帰ってこないのだ。”

文学 文学

大丈夫、大丈夫、いつかは

ここを抜ける日がやって来る。”

キッチン 吉本ばなな



(関口)

唯一の肉親である祖母を喪い、天涯孤独となったみかげは、祖母が生前懇意にしていた雄一の家に好意で居候させて貰うことに。台所というパーソナルスペースの孤独で生きる彼女にとって、雄一の優しさは癒しとも疵ともなり……。有名な表題作と、恋人との死別の悲しみを幻想的に昇華する『ムーンライト・シャドウ』も傑作。

うた、寐に

恋しき人を見てしより

夢てふものは頼みそめてき

春昼・春昼後刻

泉鏡花



(関口)

山中の古びた寺院に迷い込んだ散策士が、和尚から聞いた話。かつてその寺に逗留していた男が、「みを」という名の美しい人妻に恋焦がれ死んだという。青大将、赤穂蛇、連なる馬、偶然では片づけられない符合、音楽か迷路のような文章。怪奇幻想の気配が色濃く現れた作品。

変身

フランツ・カフカ



(川中)

ある日、巨大な毒虫に変身してしまった平凡なセールスマン、ゲルゴール・ザムザ。家族が戸惑うなかザムザの生活はあくまで冷静にそして緻密に描かれる。最初から最後までよく分からない気持ちにさせてくれる一冊。派手な変身シーンとかはないのでそういうのを求めている人は特撮を見ましょう。

ある朝、グレゴール・ザムザがなにか気掛かりな夢から眼をさますと、自分が寢床の中で一匹の巨大な毒虫に変わっているのを発見した。

文学 文学

鏡のなかの鏡 - 迷宮 -



(中嶋)

ミヒヤエル・エンデ

『はてしない物語』で知られる児童文学作家のミヒヤエル・エンデが書いた夢の断章です。夢の間をふわふわ移動していくような感覚のなかで、なにかを掴みそうになると逃げていく。こんな読書体験は他では味わえない。あなたも鏡のなかの鏡の迷宮に迷い込んでく

「許して、ぼくはこれより大きな声ではしゃべれない。」

闇の奥 コンラッド



(関口)

西洋植民地主義の暗黒面を、冒険小説の体に乗せて、不思議な魔力を感じさせる文体の作品。クルツというアフリカの奥地を統括し、奥地より象牙を大量に仕入れる人物に興味を抱き、複雑なコンゴ河を遡行する船旅の途中、鎖でつながれた奴隷を見る。アフリカ奥地の暗黒と重なる心の闇の形を描いた力強くシンプルな物語。

「昔はこのあたりも」と不意にマローウが口を開いた。「暗黒の土地だったんだ」

芝生の復讐



(中嶋)

リチャード・ブローティガン

おかしな話ばかりだ。これはブローティガンが1926年から1970年にかけて書いた短編が全部収まった本らしい。なにがどう良いのか読んだ私でもわからない。でも、読めばこれが唯一のものだということが分かるのだ。そういった文章はなかなかみつからない。

春になると少年の心は恋を思う、という。もし、その上に時間が余ったら、おそらくコーヒーを一杯飲みたいと思う余裕も持てるだろうか。

郵便局と蛇



(関口)

A・E・コッパード

若い柳と電信柱との恋物語、秘密を抱えた双子の小屋、窓から尋ねてくるはずの幽霊、全てを呑みこむ大蛇……旅先のCoppardを短編に織り込む名手として知られた作家が贈る、世界の隙間に埋もれた物語。少し変わったモチーフによる予想できない物語、意味が分からないまま感動させられるのは、漂う郷愁のせいでしょうか。

「きみと結婚したい」「まあ、でもあなた死んでるじゃない」

移動祝祭日 ヘミングウェイ

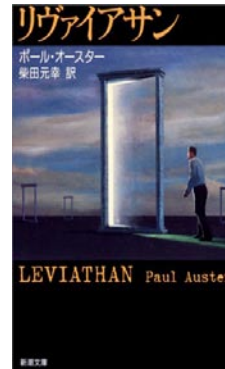


(中嶋)

第一の妻との暖かな生活とその悲劇的な終焉を綴った若き日のスケッチ。ヘミングウェイが持っていた創作への情熱を感じるとともに、最後には馬鹿な男の後悔が胸を打つ。移動祝祭日というタイトルどりのパリの日々を追いながらヘミングウェイのことが好きになれる連作短編集です。

「だいたい、作家なんてみんな、9口にするのは悩み事にきまってるんだから。」

リヴァイアサン ポール・オースター



(中嶋)

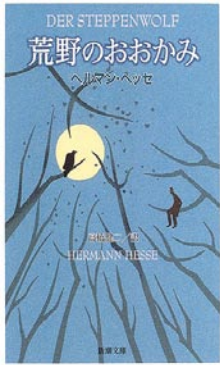
関係性、人が増える度に線が交錯し合い、思わぬところでつながっていたりすると驚いてしまう。この小説は、その関係性の線をつまぐ利用したサスペンスだ。サクセスという友人の秘密を出会いから順に説明していく中で、主人公は多くの人と出会う。誰か一人でも欠けていたら、この物語にならないだろう。

「君が一番の親友だからさ。それに君が秘密を守る人間だつてこともわかってる」

文学 文学

荒野のおおかみ

ヘルマン・ヘッセ



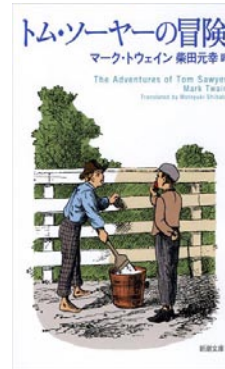
(中嶋)

身体の中に、おおかみと人間を飼
い慣らす人がいた。彼は、結局の
ところ老人になるまで、周囲の世
界と折り合いがつけられずにいた
のだ。そんな彼が踊りだす。……
良い方に転がるのか、そうでない
のか……。

かつてハリリーという名で、
荒野のおおかみ
と呼ばれた男がいた。

トム・ソーヤーの冒険

マーク・トウェイン



(中嶋)

読んでことがあるようでない、
マーク・トウェインが南北戦争前
のおおらかな南アメリカを描いた
小説です。作者のブラックユーモ
アが爆発した文章で読んでいる内
に笑いが飛び出す。主人公のトム
ソーヤーは、ガキ大将なのに、寝
る前に聖書を唱えずにいるのが怖
かったりする可愛いやつです。

「トム・ソーヤー、
カリブの黒き復讐者だ。
貴様の名を名乗れ」

飛行士と東京の雨の森

西崎憲



(中嶋)

遠くへ行く、ということに憧れを
持つ。きっと、そこには自分の知
らない何かが待っていて、それを
見つけに行くのだ。でも、不安も
ある。だって、そこは知らない場
所なのだから。ウエールズの少女
ノーナが東京にやってくる話で
す。遠くまでやってきたノーナは
なにを見つけているのでしょうか？

はたして遠方に行けば
寂しさは減るのだろうか。

灯台守の話



(中嶋)

ジャネット・ウィンターソン
全編に渡って、少しでもバランス
を崩せば、壊れてしまいそうな
繊細さを感じた。母を失ったシ
ルバーと目の見えない灯台守の
ピューのお話から始まり。ピュー
が何処かへ去ってしまい、一人
ぼっちになったシルバーの生活へ
と話は進む。温かくて、でもその
奥に暗いものがみえるような気が
する小説。

母さんはわたしをシルバー
と名づけた。わたしの体は
銀と海賊とでできている。

雪沼とその周辺

堀江敏幸



(中嶋)

作家を、うまいタイプと天才タイ
プに分けるとしたら、堀江敏幸は
圧倒的に前者であると思う。彼の
文章は、澄み切った小川の流れる
ように自然に身体に馴染んでく
る。そうして、文章が続く間、読
者はその世界に（この作品なら雪
沼）を覗いているかのように感じ
るのだ。

「ピンの音さ。ピンがはじける
音を聞いてみてくれ」

拳闘士の休息

トム・ジョーンズ



(中嶋)

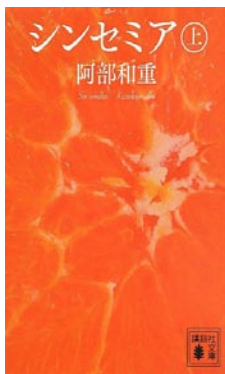
レイモンド・カーヴァーがか細い
声を持っているのなら、トム・ジョー
ンズは力強い声を持っていると表
現できるだろう。ストリートに声
の響きが伝わってくる読者はグ
ラッとときてしまう。それが気持ち
いいのだ。

ジョージソンがマシンガンを拾い
あげ、敵に向けてすばらしい勢い
で掃射を開始した——タッタッタ、
タッタッタ、タッタッタ！

「神町は、神聖なる土地を意味する名ではないのだ」

シンセミア

阿部和重



(中嶋)

神町という田舎町のなかで起こる三つの事件、それらは町の権力構造、歴史と深く絡まり合いつながり、全体に飛び火していく。総勢登場人物五十人を超える群像劇が絡まり合うのを目撃したら、きつと度肝を抜かずだろう。

夜明けまえの暗闇に眼ざめながら、熱い「期待」の感覚をもとめて、辛い夢の気分の残っている意識を手ざぐりする。

万延元年のフットボール

大江健三郎



(中嶋)

ああ、狂おしいほど濃密な文章だ。読んでいる内に酔っているかのよう感じられてしまう。ノーベル賞作家大江健三郎の代表作ともいわれる長編。この小説には渾身の力がこもっている。主人公が求める「期待」の感覚、村で行われる「恥」、弟がなそうとした「理想」。まるで金脈のように、なにかが現れる。

わたしは、

十になった子供の頃から、

やし酒飲みだった

やし酒飲み

エイモス・チュツオーラ



(柴田)

主人公の家には広大なやし畑があつて、それでやし酒造りの名人が毎日大量のやし酒を生産してたわけです。でもある日その職人は死んでしまう。だから主人公は思ったわけです。「死者の国に行つて職人を呼び戻そう」ただひたすら酒を愛する男の死者の国への珍道中です。つつこみどころが多すぎるので頑張つて読みましょう。

文学 文学

去年、ピクニックの主催者たちは私たちを爆撃した。

大いなる不満

セス・フリード



(中嶋)

我が大学の英文学科におられる藤井光先生が訳された短篇集(宣伝)。読んでいる間、常に物語世界に取り込まれていた。不条理な世界を描くなかに現実が見えて怖くなる現実の寓話。セス・フリード氏の観察眼と知識量に圧倒される。特に、最後の『微小生物集』は素晴らしい。

ある夕方表への出会い頭に流星と衝突した

一千一秒物語

稲垣足穂



(中嶋)

ドラッグをやっているのかと思つた。それぐらい不条理で不思議な人を喰つてかかったような掌編が集つた小説です。ロマンチックなだけじゃない天体の捉え方もあるのだなとよくわかります。稲垣足穂先生曰く、これ以降に書く小説は『一千一秒物語』の脚注にすぎない、らしいです。

「あなたは何故沈黙しているのか」

沈黙

遠藤周作



(中嶋)

「神の沈黙」という主題を扱った日本のキリシタン小説。日本という特異な場所の中で、苦しみながら布教を続けるロドリゴ。その苦悩を中心にシヨッキンダな迫害の過程を書く。

文学／大衆小説
文学

原色の街・驟雨
吉行淳之介



(後藤)

しかし、この街の底から、一種の解放感のようなものを嗅ぎ出し、そうとする少数の人々も存在しているのだ。(原色の街)

はなやかに彩られた世界と女たち。そこに潜む心の動きを繊細に描いた吉行淳之介。肉体という確かな物から精神という不確かな見えなないものを探る珠玉の五編。

ゴドーを待ちながら
サミュエル・ベケット



(後藤)

現代演劇の最高傑作でありながら、最大の問題作。理解しなければ面白いか面白くないか判断がつかないというのは、この戯曲が論破してくれる。あまりに示唆に富みすぎて、私たちはかけらほどしか理解を掴めない。

もう行くこう。
なぜさ？

だめだよ。
ゴドーを待つんだ。

転落・追放と王国
カミュ

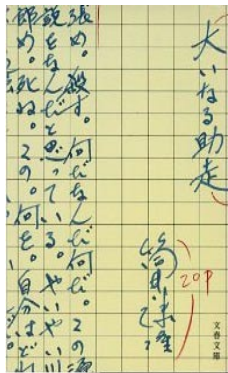


(後藤)

休みなしに誰にもなく喋りまくる、前もって答えがわかっているのに、いつも同じ問題と向き合っているんですから。(転落)

「裁き手であり改悛者のわたし」がひたすら聞き手に向かつてしゃべるしゃべるしゃべる。うるせえと思いつつもその言葉たちが意味するところにわたしたちはひきこまれてしまう。転落した先で会いましょう。

大いなる助走
筒井康隆

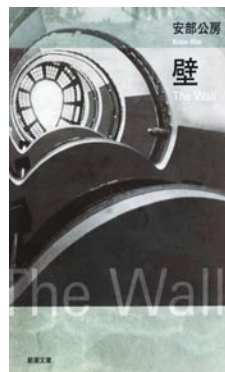


(藤野)

作家志望者は見ない方がいい！見たら筆を折りたいくなります！「本の虫は害虫」「作家志望者なぞ社会のごみ」ってことがこれほどかというほど叩きつけられます。ああもう僕はみんなつちやつた。なあんで俺はみんながインターンなんだ言ってる時に金にもならない駄文をうんうん言いながら書いてるんだらうなあ…。

『おれは病弱で繊細な文学青年なんだ。警察はいやだ。耐えがたい。助けてくれ。助けてくれえ』

壁
安部公房



(後藤)

多くの名前のようにではありませんでしたが、やはり多くの名前らしくもありました。

ここでわたしがもっともらしい解説をしてもそれは一つの論で、違う読者が読んだ時それを肯定できるかはわからない壁があるけれども、すべての論を肯定したうえで安部公房の世界、主張が作られている壁。

ふがいない僕は空を見た
窪美澄



(木村)

高校生の卓巳は毎週コスプレ姿で主婦と不倫している。その主婦の里美は不妊治療に悩んでいる。卓巳の友人の良太は団地の貧困な暮らしから抜け出せず、卓巳を好きな七菜は、卓巳の母の寿美子は……。みんな、心にどうしようもない影を抱きながら、それでも生きていく。読んだ後に、少しだけ前を向ける一冊。

「おまえ、やっかいなものをくっつけて生まれてきたね。」

「刑務所で人を信用したのは、間違っていたんだらうか」

箱の中

木原音瀬



(松山)

痴漢の冤罪で刑務所に入った堂野は、殺人罪で服役している喜多川に出会う。喜多川の間人としての欠落を感じた堂野は喜多川に構い、相手に気にいられていく。命がけで一途な愛を抱き続ける喜多川に堂野は応えられないが……。物語は、もつと違う結末もあつたかもしれない。でも、喜多川のまっすぐな魂に、敬意を。

「動かないかも、しれないわ。美しいものしか乗せて走らない。それがキハ兆ミ。とくべつな少年少女だけのための乗り物。」

少女七竈と七人の可愛そうな大人

桜庭一樹



(松山)

鉄オタの美少女、七竈の友達は、同じく鉄オタの美少年、雪風だけ。「母のいんらん」のせいで肩身のせまい少女時代を送る七竈に、大人たちは干渉し何かを落としていく。七竈と雪風の一対になつたような、まっすぐでうつくしい関係とその変容が強烈な切なさを残す、そんな一冊。

「新人賞を受賞して作家デビューした場合、その後はどの程度生活を保障してもらえらるんでしようか」

歪笑小説

東野圭吾



(松山)

売れない作家は大変だ。売れている作家もまあ、大変だ。どちらでもない作家も、まあまあ大変だ。あと忘れるな、編集者だつて大変なんだよ！——とりあえず、皆大変なんです。小説づくりの裏話を、ユーモアたっぷりにお伝えします。だんだん荒唐無稽なキャラクターに引き込まれていく不思議。

大衆小説

大衆小説

「自分たちにはもはや、なにものかを選ぶという事は出来ない。」

雲の墓標

阿川弘之



(木村)

太平洋戦争末期、吉野は海軍へ入団する。彼の日記には、お国のためにこの身を捧ぐと誓い訓練をこなしながらも、置いてきた学問に、日常に、命に、未練を感じて揺れ動く思いが表れる。彼は、彼の友人たちは、一体何を思つて出撃していったのだらう。学徒出陣に駆り出された大学生の姿を彼らの日記や手紙から辿る戦争小説。

煙か土か食い物

舞城王太郎



(森本)

故郷で起こつた連続暴行事件に母が巻き込まれ、復讐に燃える二郎。名医かつ名探偵の主人公が活躍する推理もの。圧倒的な文章量で、そしてなにより改行しないから一文抜き出したら150文字におさまられねえ。読めるもんなら読んでみるマザーファッカー！

スカイ・クロラ

森博嗣



(森本)

キルドレ、子供の姿で永遠に生き続ける不老の存在。彼らは戦闘機で死と隣り合わせの空を飛ぶ。この世界と近いようで遠いような世界観、シリーズを読み進めるたびに増える謎がとても魅力的な一作。

僕はまだ子供で、ときどき、右手が人を殺す、その代わりに、誰かの右手が僕を殺してくれるだらう。

終末のフール 伊坂幸太郎



(森本)

∞年後に地球の終わりが来るという発表から5年後の世界、地球と人類の余命はあと∞年。発表から5年が経ち、人々は終末を受け入れつつある。余命∞年の時間の中で彼らは人生を見つめ直す。人生をいかに生きるか？今日を生きることの意味とは？そんな漠然とした悩みの答えが明確な死の存在により形を得ていく。

秘密の儀式めいたトランプ奇術殺人は何を意味するのか。(紹介文より)

11枚のトランプ

泡坂妻夫



(後藤)

マジシャンとしても有名な著者が今回も楽しませるためのからくりを用意。作中の作品が本の世界で種明かしに使われる変わった構成を用い、読者が犯人を当てても負ける快感をどうぞ。

“金田一君、おれの代わりに……おれの代わりに獄門島へ行ってくれ。”

獄門島 横溝正史



(後藤)

ミステリ好きならもう読んでると思うが、あえて言うけど、このミステリを読まないで死ぬことはできないし、許されない。ミステリの金字塔、大傑作。

大衆小説
ミステリ
ミステリ

それだって、
日がたつうちに薄れていく

不夜城 馳星周

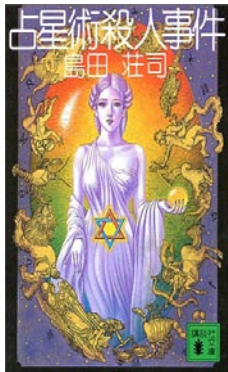


(藤野)

日本のノワール文学の金字塔。中国人と日本人との間に生まれた主人公はどっちにも属せぬまま歌舞伎町の闇に飲まれていく。ラストシーンで胸に穴が開く。自分が知らない世界なのに、なんでこんなに身近に感じるんだ…。

占星術殺人事件

島田荘司



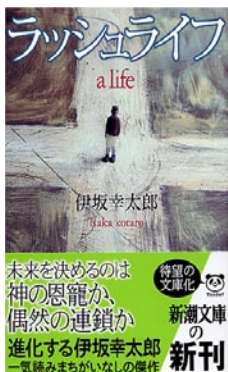
(藤野)

解ける！はずなのに、解けない！御手洗探偵が真相を語った時、トイレでこの本を読んだ僕は便座から飛び上がりました。鍵は全て用意されているのに、なぜか解けない(トイレのじゃないよ)。ここまでしてやられたミステリは初めてでした。みんなも便座から飛び上がってくれ。

『私は悪魔付きである』

「たまたまね、たまたま、この鉄砲が手に入ったんで、強盗をはじめようかと、この人と相談して決めたのさ」

ラッシュライフ 伊坂幸太郎



(松山)

平行上に書かれた3つの物語がどう結びつくのか、読み終わるまでドキドキしっぱなし。伊坂ワールドを体感してください。黒澤さん大好き。

それなのに、無駄遣いをしな
かったのは、偉い。俺の教育が
いいから——おっと危ない。今
の台詞は取り消し。

ステップファザー・ステップ

宮部みゆき



(松山)

雷鳴轟く夜、双子の中学生に拾われ
た手負いの泥棒が一人。警察に突き
出さない条件は、「お父さんになるこ
と」でした。成り行きで父親役
になり、子供たちの生活費を稼ぎ、
旅行のお供や果ては授業参観まで！
可愛らしく、賢く、したたかな子供
たちに振り回されるプロの空き巣。
ちよっとした事件に巻き込まれなが
ら成長する奇妙な父子の絆に、ほっ
こり笑ってください。

ミステリ ミステリ・ホラー

……まるで僕が、……これ
から死刑になる僕が、きみ
の中で生き続けるように。

中村文則



(後藤)

『掏摸』が有名作として取り上げ
られる彼が書いたミステリ。死刑
になる写真家とその姉、作家であ
る主人公と編集者と写真家の犠牲
になった人たち。あなたは登場人
物を全くの他人として見ることに
できるだろうか。

「そのワープロでおれのフル
ネームを打ってもらってくれ」

漂白の楽人

内田康夫



(周防)

自分が死んだら浅見光彦に形見の
ワープロを渡して、そうしてもら
えと奇妙な事を言い残して殺され
た兄。続いて母も殺された。ワー
プロに残されていたのは新潟の一
地方、月潟村の風土誌。事件と関
係ない事柄が結び合わされ浮かび
上がっていく真実からは片時も目
が離せない。

子供たちが、一言の別辞を父に語
ろうと祈っているその一念が、暗
号の紙にこもっている、そう考え
ることが不合理であろうか。

アンゴウ

坂口安吾



(後藤)

白痴、墮落論などが有名な坂口安
吾のミステリ。タイトルに意味
を感じざるを得ない。安吾の素晴
らしい世界を堪能できる岩波文庫
『桜の森の満開の下・白痴』収録。

「さよならを言うのは、
わずかの間死ぬことだ」

ロング・グッドバイ

レイモンド・チャンドラー



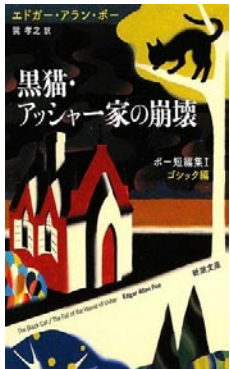
(中嶋)

胸を震わすハードボイルドな台詞
の数々。魅力的なキャラクター。
それらが絡まり合って、形作られ
た小説が素晴らしいわけがな
い！男同士の語りえぬ友情に突
き動かされて、信念を突き通す主
人公のフィリップ・マーロウの姿
をみて、静かに燃える熱さを感じ
て欲しい。

季節は秋、日がな一日、気急ぐ暗く静まり
かえって、空から雲が重苦しくたれ込める
中を、わたしはただひとり馬に乗り、無類
なほど鬱蒼とした地方を旅していた。

黒猫・アッシャー家の崩壊

エドガー・アラン・ポー



(関口)

広い分野で活躍し後世に多大な影
響を与えた作家の、昏い詩的感性
を覗かれる短篇集。上に引用した
のは『アッシャー家の崩壊』の書
き出しだが、息が詰まるほど重苦
しく閉塞感に満ちた文章はある種
の安心をも与えるように感じた。
ゴシックの美学を著した純文学と
も解釈できる。

私が出来たことに気づくと、こちらに顔を向けた。まるで頭の重みで転がったような、重力に負けた動き方だった。

赤々煉恋

朱川 湊人

強く望んだ願いは輝いてその人の世界を照らすばかりでは無い。死者を美しく写真に残そうとするのと、居ない同級生を想うこと、この世のものでないものとの接触を望むこと……。禁忌に対する純粋な想いが招く、苦い後味を残す不気味な悲劇。リリカルでノスタルジックな氏の作風からは大きく逸れた、暗い話を集めた作品集。



(関口)

ホラー
ホラー

すべてが死に絶え、冷たく灰色にかたまつて、空気もなく、風も吹かない星に落ちたような気分だった。

白魔

マッケン

籠にいる私を覗き込む「白い人」の記憶に始まり、泥人形の呪術に長けた御伽話を良く知る祖母。茨の茂みを抜けた先に見つけた謎の石碑。少女の手記という形式で語られる《彼女》の記憶は、真つ直ぐに見てはならないものを見聞きしていた。ニンフとの対話や意味不明な固有名詞に、自然の美しさや禁忌に迫る感覚が常に伴う。



(関口)

「無数の目がこちらを見、何十という血まみれの手が、家中の隅や隙間からつかみかかってくるような気がした。」

秘書綺譚

ブラックウッド

古典的な幽霊譚『空き家』に始まり、正体不明の存在を相手取る『秘書奇譚』、『窃盗の意志を以て』。可愛らしい子鬼の悪戯、魔術で体の一部を変えられる、詩的幻想の空間……。ゴシック的な硬質にして不可視の怖さと、自然という莫大・曖昧なものに対峙する人間の敗北を、怪奇という娯楽に落とし込んだ傑作短篇集。



(関口)

「砂男はまだいるの？」

砂男 / クレスペル顧問官

ホフマン

様々な解釈を呼ぶ、不可解なトラウマと現実が交じり合う無気味な表題作に加え、美しい歌声をもつ娘・アントーニエが歌うことを頑なに禁じる父・クレスペルの物語、幻想的冒険譚『大晦日の夜の冒険』。多くの作家に影響を与えただけあって、狂気の描写は神経質なまでに生々しく、加えて現実の失意も感じさせるといふ側面も。



(関口)

「みんな惨めな奴を嫌うのだ。だとすればどんな生き物よりも醜いこのおれが、嫌われないわけがないだろう？」(中略) そのおれをお前は殺そうというのか」

フランケンシュタイン

シェリー

フランケンシュタインに造られた人造人間は、世界と人間を並はずれた知能と純粋な気持ちで分析できる存在。そんな心の持ち主への厳しい仕打ち、求められない自分の出自。行きすぎる科学への警鐘としては勿論、「人は結局何を見て人とするのか」ということを《怪物》の罪を通して描いた古典。



(関口)

口をかつぱと開き、黄色いものを吐いた。蛇口をいつぱいに捻ったように、とめどなく。

きんきら屋敷の花嫁

添田小萩

ゴシック小説と聞いて浮かぶものの。暗い館、深い霧、不気味な存在、硬質な文体……。それらを全て日本にスライドさせて大成させました。きんきらのお屋敷に代々伝わる、花嫁による「砂女(?)」を誘致する伝統儀式。金を吐く女が幽閉される日本家屋。物言わぬ砂女の挙動、話の進み方が、気持ち悪くてとにかく「変」。



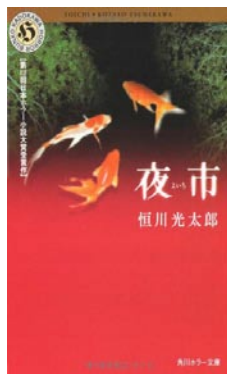
(関口)

「もうそれは、ただそこにある、現実、としか呼べないものだった」

夜市

恒川 光太郎

学校蝙蝠によって告げられる「夜市」の開催。そこには有形無形に拘わらず、あらゆるものが売っている。或る代価を引き換えに得た青年が、叶えた願望の陳腐さに苦悶しながら、その代価を取り戻しに「夜市」に再び迷い込む。懐かしい筆致で描かれる、救われない繰り返しに切なくなる。併せて『風の古道』もよく練られた傑作。



(関口)

ホラー

ホラー・SF

「ゆらゆらと船のように頼りない私たちの自我の現実への縛り、じつはテレビの画面の端の時刻表示だったり、郵便受けに差し込まれた新聞だったり、腕時計に現れた新しい日付だったりするんじゃないやなくて？」

ピカルディの薔薇

津原 泰水

うだつの上がらない作家「おれ」こと猿渡がふと出会う怪異。あまりに現実と地続きとなつて現れる夢幻のような出来事。猿渡がどことなく頼りなくもあるせいで、目の前で起きていた怪異が変に馴れ馴れしくユーモラス。いや、そんな猿渡だからこそ怪異に呑みこまれないのかもしれないが……。



(関口)

痛苦が体のどこかに現れる時、私はほんの僅かの間、痛みを感じ、それからたてえようのない安らぎをもって、痛む場所を、いとおしむように撫でさすのです。

少女禁区

伴名 練

呪術と美少女。こんなモチーフでホラーロマンス書かれたらきゅんとしてない訳がない！呪術に長けた体質から人々に疎まれる美少女の従僕として過ごし「私」。玩具の様に扱われ、死後も尚縛り付けられる彼女の呪いに「痛切」な愛を感じずにいられない。ライトな文章ですが、最後の不意打ちにやられます。



(関口)

「人々が道を行き交います。彼らはいつも、きちんとした理由があつて、街のある地点から別の地点へと向かっているのです。どうか。」

海に住む少女

シュペルヴィエル

優しさが溢れて悲しさに変わってしまう瞬間を捉えたら、きつとこの小説になるのだろう。この小説の悲壮感には優しさがくつついていからたちが悪くて、本を置けなくしてしまう。すつと染みこんできた優しさ付きの悲しさは、ずつと読者の心から消えてくれない。



(中嶋)

「いつかやると思ってた。じゃ、遠慮なく……。」

かにみそ

倉狩 聡

日々を無気力に過ごす「私」は、ある日海岸で小さな蟹を拾う。その蟹は大きくなり、人語を話す様になり……。洒落なジョークを飛ばし、主人公と友達だと明言する蟹。「食へることは生きる事」というテーマに基づいて人を食べ続ける蟹生き様、そして自分の生に疑問を抱く「私」。そして蟹の感動的な覚悟。感動できるホラー。



(関口)

『二足す二は五である』

一九八四年

ジョージ・オーウェル

SF史上最高小説にして、文学史上最高小説。それと共に「イギリス人の家にあるけど読了されてない小説ナンバーワン」としても知られています。けど、そんなに堅い話じゃなくて、面白く、激しく、そして響く。これ読めねえなんてイギリス人はわかってねえなあ（笑）。



(藤野)

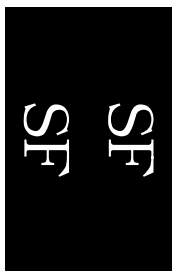
だからこそ、わたしたちは死ななければならぬ、と感じていた。命が大事にされすぎているから。互いに互いを思いやりすぎているから。

ハーモニー 伊藤計劃

見せかけの調和(ハーモニー)を謳う社会に反乱する為に死んだ友人ミアハの影を追うトアン。彼女がその先に行き着いた人類のハーモニクスとは一体何なのか。キーワードは「意識」。ロジックがその緻密さ故に、読み手に恐ろしいほどの鋭利さで差し迫ってくる。イデオログっぷりをかます女の子は可愛い。百合姫はどうなったの。



(山田)



「だがな、天にいるだけかさんはおまえが気に入ってるんだよ」

タイタンの妖女 カート・ヴォネガット・ジュニア

私たちは誰かに動かされている。そんな気持ちになったとき、きっと私たちはやるせなくて、動かししている誰かを憎むようになる。そんなテーマをこの小説は扱っている。インチキ宗教、火星軍、未知の惑星、これらのガジェットがつながり合って、私たちはもう一つのこと気に気付けるはずだ。

タイタンの妖女
The Sirens of Titan
カート・ヴォネガット・ジュニア 遠藤久美子訳



早川書房

(中嶋)

「知りたい」。

それは本質的な欲求だ

あらゆるものが情報化され、それを処理するため全ての人間の脳に「電子葉」の移植が義務化された2081年京都。主人公、連レルの恩師が残した少女、知ルは人の心すら「情報」として処理できる「量子葉」を備えた人知を超えた存在だった。彼女はその宿命的に「全知」を目指す。その結果、世界は大きな変革を迎えることになる。

know 野崎 まど

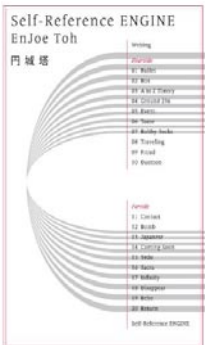


(山田)

全ての可能な文字列。全ては本の中の含まれている。

Self-Reference ENGINE 円城 塔

でかい話ですよ。小説の枕でこんな大きな話をされると、たいてい場違いに感じるか、一気にその小説に引き込まれるかのどちらかなんですが、これは後者でしたね。この後には不可解な連作が続いていきます。きっと円城塔の魔力にあなたも本書から離れられなくなるはず。

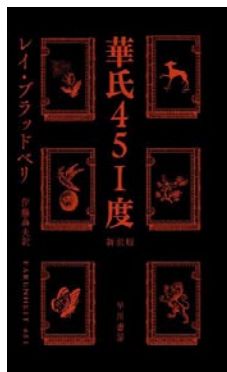


(中嶋)

「しかし、わしのみたところ、あんたが必要としておられるのは、書物そのものではなくて、以前、書物のなかに存在したへあるものらしい。」

華氏 451 度 レイ・ブラッドベリ

宣言する。これは書物を愛する人による、精一杯の書物への愛情だ。「本」が禁じられ焼かれる世界で焚書官として働く主人公モントーグが本を手にしたとき物語が動き出す。本を巡る人々の苦しみ、一筋の希望。本が読まれない時代に染みる、読書家のための小説。本のために涙を流せるとしたらきつとこの小説しかないだろう。



(中嶋)

書き直さなければならぬ、なぜなら既に、世界はリライトされたのだから。

リライト 法条 遥

史上最高最悪のパラドックス。読み終わったあと、読者が「うわああああああ」と叫ぶ確率100パーセント。ネタバレくらう前に読んでおきましょう。



(後藤)

「最後の瞬間が訪れるとき、私たち人類に、穏やかに微笑みながら死ぬ資格があるのかどうか——それは誰にもわからないんだらうな。」

華竜の宮

上田 早夕里



(後藤)

ホットブルームの活性化により陸のほとんどが水没してしまった世界でも、人々は限られた資源や文化の差異により衝突し続けている。人と人、人と人間以外の存在の関係について複数の視点から奥深く入り込んでいける。

「どーかついでがあつたらうらわのアルジャーノンのおはかに花束をそなえてやてください。」

アルジャーノンに花束を

ダニエル・キイス



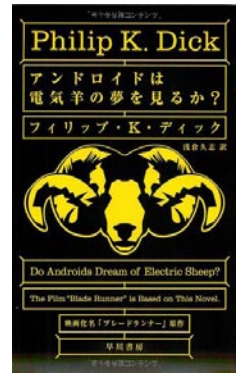
(後藤)

現在と言うものをS&Mという未来から見て感じる。あたまがよくなるとはどういうことなのか。主人公の半生を追って、私たちはただ涙を流すだけだろう。

「われわれにはきみたち人間に備わったある特殊能力が欠けているらしいのさ。感情移入とやらいうものだそうだが」

アンドロイドは電気羊の夢を見るか?

フィリップ・K・ディック



(関口)

言わずと知れたSFの金字塔。生命と人間というものの問いかけの本作は何とも生命愛に満ちている。一寸の虫に五分の魂があることを信じるアンドロイドと、そのアンドロイドを仕事でハンティングする人間。限りなく曖昧になって行く境界。タイトルに帰って物語の真意に気付かされる辺り、色あせない古典だと感じる。

SF エッセイ

『親愛なる友よ、私が小説の形式に関してこれまで手紙に書いてきたことはきれいさっぱり忘れて、まずは思い切って小説を書き始めてください、そう申し上げて筆をおきます』

若い小説家に宛てた手紙

バルガス＝リョサ



(藤野)

筒井巨匠の「大いなる助走」にやられた皆さんはこれを読みましよう。ノーベル文学賞受賞の南米作家、バルガス＝リョサが僕たちに書く喜び、意味を教えてください。単に小説指南書としても素晴らしい出来。リョサ先生、ありがとうございます。

私は今これ程切り詰められた時間しか自由に出来ない人達の軽蔑を冒して書くのである。

硝子戸の中

夏目漱石

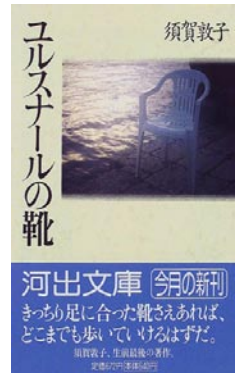


(中嶋)

病弱な夏目漱石先生が引きこもりながら書いたエッセイ。夏目漱石先生のところにはいろいろな客がやってくる。だいたいは、作者が困らせられる。そして、困った困ったと言いながら、なんであんなったんだらうと回想する。いやあ、頭の良い人の書くエッセイはなんでこんなにおもしろいんだらうか。

ユルスナールの靴

須賀敦子



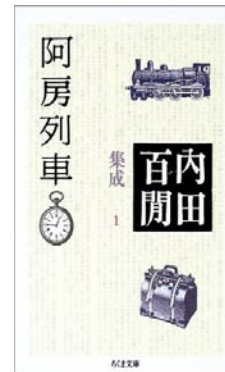
(柴田)

私がこの本に(というよりこの文章から始まるプロローグに)初めて出会ったのは受験生のときだった。駿台の教室で解いた、過去の問だか予想問題だかのテキストにこれが載っていたのだ。はたして私はいつかきつちり足に合った靴を見つけれらるだろうか、どこかへ歩いて行けるだろうか。私は問題を解きながらぼろぼろ泣いた。

「用事がなければどこへも行つてはいけないうわげはない。」

阿房列車 内田百閒

用事のない内田百閒先生電車の旅をする(そしてすぐ帰ってくる)。随筆の名手と言われるだけであつて、その何もない旅が読んで私たちにとつておもしろいものになつてくる。なんだか、不思議な気持ちだ。百閒先生の偏屈さが見て取れるからなのだろうか？



(中嶋)

エッセイ・
ライトノベル
ライトノベル

『真正なる右翼は、
日本に私ただ一人である』

大日本サムライガール 至道 流星

目的は政治の頂点、手段はアイドル。もうこれだけで最高です。煽り文だけで三日は笑わせていただきます。けど内容はもつとすごい。そんじよそこの経済小説なんかには負けない濃さです。あと日穂ちゃんめっちゃかわいい。だいしゅき…。



(藤野)

『私も他の人なんか知らない。みんな死んじゃつても知らない。わたしも浅羽だけ守る。わたしも、浅羽のためだけに戦つて、浅羽のためだけに死ぬ』

イリヤの空、UFOの夏

夏になると必ず読み返して泣きます。所謂セカイ系というジャンルでありながら、そのセカイ系というジャンルを否定してしまつた作品。僕と私だけで成立する世界、けれどそこにはやっぱり…。僕たちは世界を変えることはできませんね…。



(藤野)

けど俺は、俺たちは、本当は。神を、魔術を、怪物を、神秘を、奇跡を、伝承を、終末を―生きる心添えにしたい。好きでもないカラオケに行つたり、お洒落に大枚を投じたり、気の合わない人間に尻尾を振つたりしたくない。

AURA ~魔竜院光牙最後の闘い

過去に中二病的立ち振る舞いからイジメを受けた経験を持つ高校生、佐藤一郎。そんな彼の前に現れた佐藤良子は(筋金入りの中二設定で人と接する)魔女だつた。一郎は、ひよんなことで彼女との交流を深めていくが、次第に周囲との軋轢が生まれてしま…。mebae 絵すき。スクールカーストよりもオタクの自意識が主題だと思ふ。

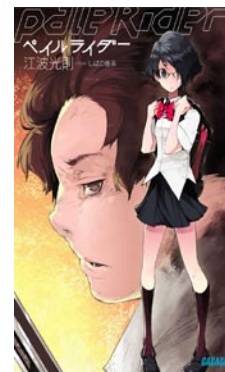


(山田)

『俺に詫びろつてんなら、お前、余計なことをしすぎたよ』

ペイルライダー 江波 光則

デブの転校生である主人公の唯一の趣味は転向した先のクラスを崩壊させること。もうこの一文だけでろくな結末が想像できない。他人に高校の頃人生壊された、もしくは壊した人、必見です。ラノベだつて甘く見てたら突き落とされますぜ。



(藤野)

「この店で、あなたの帰りを待っています。」

空の彼方 菱田 愛日

小さな路地裏に隠れるようにしてある防具屋「シャイニーテラス」。女主人ソラは訪れる客たちと必ずある約束を交わす。それは、生きて帰り、旅の出来事を彼女に語るというもの。ある日店を訪れた青年アルとの出会いがソラの止まつた時間を動かし始める…。心安らぐ「約束」のファンタジー小説。



(周防)

「良いコーヒーとは、悪魔のように黒く、地獄のように熱く、天使のように純粹で、そして恋のように甘い。シャルル・モーリス・ド・タレーランIIペリゴール」

珈琲店タレーランの事件簿

岡崎 琢磨

京都の一角にひっそりと佇む喫茶店「タレーラン」。恋人と喧嘩した主人公がここで出会ったのは追いつめられた理想の珈琲と、美しきパスタ・切間美星だった。日常的な謎を鮮やかに解決する手腕と、軽妙な会話、魅力的なキャラクターに引き込まれるライトなミステリー小説だ。



(周防)

ライトノベル
詩・短歌 評論
評論

他者から承認されるため、いまある承認を失わないために働くのだ

承認をめぐる病

斉藤 環

マズローの欲求段階説などの精神医学の理論を用いながら、AKB48、エヴァンゲリオン、スクールカーストを読み解く。その根底にはある一つの「承認」という言葉が共通していた…?とにかくツイッターに「寂しい」ツイートする暇あったら読んでみて。



(藤野)

水鳥が

羽根を動かす場面のみ

無音の映画 これは悲しみ

裏島

石川 美南

表紙の魚につられて購入。初めて買った短歌集だった。帯に描かれていた短歌(引用)に一目ぼれしてしまったのだった。見るたびに主体の心情に浸され、情景がぼつと浮かぶ。女性らしい瑞々しい静かな歌が多い。



(柴田)

「なんとなく幸せで、なんとなく不安。そんな時代を僕たちは生きていく」

絶望の国の幸福な若者たち

古市 憲寿

20歳の若手社会学者が記す今の若者論。こんなにも希望のない世界で、なぜ僕たち若者は自らを幸せだと思いつつ暮らしているのか。その理由がここにある。しかし20歳でベストセラーって、印税どれだけ入ってるんですかねえ?



(藤野)

「たろうくん

「僕も立派なマキャベリストになるためがんばるよ!」

よいこの君主論

架神恭介・辰巳一世

小学生がクラス内カーストの頂点に立つためにマキャベリの著作「君主論」を駆使する!もうその時点で爆笑です。マキャベリの君主論は就職活動の指南書として書かれたらしいので大学生は必見!ちなみにあとがきはまさかのあの人です…!



(藤野)

「人間は自由だ」という虚構

「不自由」論

仲正 昌樹

人間とは「主体的」な生き物だ。ヒューマンイズムの矛盾を、政治哲学で読み解く。本当にいい社会とはなんだ?多様性とは、「自由」とはいつたいたいなんだ?いい意味でみなさんの思い込みをぶち壊してくれること間違いなしです。



(藤野)

複製技術時代の芸術作品に
おいて滅びゆくものは作品
の 아우ラ である

「複製技術時代の芸術作品」精読
知覚と技術の関係から写真や映画
などの複製芸術が存在する時代を
捉えたベンヤミンの最も著名な
著作を解説する。芸術に関心があ
る者ならば必読書であると言えよ
う。巻末にベンヤミンの論文が全
文ついでているのでお得。



(周防)

評論 / 漫画
漫画

「不幸だねー不幸だねー そんな
キミに魔法の力を与えよー。」

魔法少女サイト
佐藤健太郎

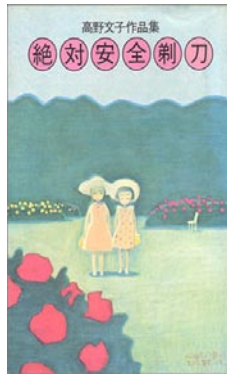
学校ではいじめ、家ではDVにあ
う中学生の朝霧彩。とあるサイトを
覗いた時に現れたのは魔法のス
テッキ。謎のキーワード「テンペ
スト」の正体を探り、魔法少女た
ちの殺し合いが始まる。『魔法少
女オブリエント』の作者が示すも
う一つの魔法少女サーガ。



(周防)

でもわたしは
強いうそつきになりたいんだ

絶対安全剃刀
高野文子
短編二作収録の漫画作品集。少
女性というか、女の子特有の今こ
の瞬間にしかない危うさを可愛ら
しく、しかし淡々と（そしてだか
らこそ残酷に）描いています。一
概には説明できない、恐ろしく詩
的な漫画です。そして何よりタイ
トルが素敵。絶対安全剃刀って。
安全な剃刀なんて絶対的なバラ
ドックスですよ。




(山田)

「この世に夢は無い
絶望と共に生きる」

イノサン
坂本眞一
フランス革命で王の首を刎ねた処
刑人「代目」ムッシュ・ド・
パリ」シャルル・アンリ・サン
ソン。純真と気高さで処刑廃止を
目指し過酷な運命に立ち向かった
死神の一生を描く壮大な歴史大河
物語が始まる。画力の高さも必見
です。



(周防)



発行元：同志社文芸同好会

mail：dousisyabd@gmail.com

HP：http://yukari.koborezakura.com/

Twitter：@DbungeiD

感想・サークル参加希望・部誌のバックナンバーが欲しい等、
ご用件がある場合は、上記まで気軽に連絡ください。